

伊勢歌における「あひにあひて」なる表現の解釈をめぐる

柴田 まさみ

一 「解釈」という言葉と問題の所在

「解釈」という言葉の語義は、文字テキストというべき記号が、わたしたち読者に対して示している情報、すなわち意味するところを汲み取るということである。したがって、文字テキストの明示することがらの範囲内で解釈することが肝要であって、その範疇から逸脱することは、曲解にはかならない。しかしながら、すべての文字テキストがひとつの情報を包含しているとは限らない。すなわち、二説以上の意味を秘めているテキストも、すくなく存在するのである。

小考においては、そうした事例として数えることができる、平安時代の女流歌人・伊勢（生年未詳、天慶二（八九三）年頃）の詠んだ、

七五六 あひにあひてもの思ふころのわが袖に宿る月さ

へ濡るる顔なる

『古今和歌集』⁽¹⁾ 卷第十五・恋歌五・伊勢 ※他、『後撰和歌集』卷第十五・雑四、『古今和歌六帖』第一・「さぶの月」等に入集。もとより、『伊勢集』にも収載されている。⁽²⁾

という歌の、特に、解釈の分かれる初句の表現「あひにあひて」について——『合ひにあひて』なのか、『逢ひにあひて』なのか——を考察し、和歌を読み解くとは、いったい如何なることであつたのかという課題の一端を、いささか論じることが、目的である。

まず、当該歌の問題となる初句以外、第二句以降を解釈しておく、次のとおりである。

もの思ひする——思い悩む頃の私の袖に宿る月までも

(私の顔だけでなく、涙に)濡れている顔をしていることよ。

さしあたり、右のように訳出することになる。「もの思ふ」とは、この三十一文字の世界に生きる主人公の思い悩みであり、具体的には、恋愛に関することであると推測される。おそらく、愛する人を恋慕い続けてきたその果てに宿る思い悩みである。それから、「袖に宿る月」とは、女性の装束の袖に、涙の水たまりができ、それが鏡のようになって、そこに月が照り映えるという意である。「濡るる顔」というのは、濡れている顔と訳することができるが、顔が濡れている、すなわち、涙で顔を濡らしているということである。王朝語において、「○○顔」という言い方は頻出するが、特に、当該歌におけるこの語句は、『源氏物語』の「須磨卷」の一節や『更級日記』の記事にも反映されている。そうした角度から見れば、当歌のキーワードといっても過言ではない。

以上、第二句以降「もの思ふころのわが袖に宿る月さへ濡るる顔なる」を、語釈的に読み解いてきたが、つまり、

《恋愛に向き合ったすえ、思い悩むようになった頃の私は、涙に濡れている》

というような情況が、着物の袖に宿る月という情景の喩えを

以て、歌い上げられているのである。さらにいい添えておくなら、連体形で結びおかれた「濡るる顔なる」という結句は、詩中に余韻をもたらしている。

二 初句「あひにあひて」の解釈

と、ここまで、二句以降「もの思ふころのわが袖に宿る月さへ濡るる顔なる」について、解釈をしてきたわけであるが、問題は、初句「あひにあひて」である。夙くに、竹岡正夫氏は、『古今和歌集全評釈』(一九七六・右文書院)において、初句「あひにあひて」の解釈には諸説あることを指摘し、

〈A 物思う最中にさあしあわせて……「教長」・「古今問答」〉

〈B 月までも私に合わせてぬれる顔であって……「栄華」「首書」「余材抄」「打聞」〉

〈C 折に合って……「両度聞書」〉

〈D これかれもよくかなくて、そろいもそろって……「遠鏡」「金子評釈」「窪田評釈」「叢書」「大系」「文庫」〉

〈E 逢いに逢って……「至文」〉

〈F 私の心によく似合って……「全集」〉

といった具合に諸説を分類。そして、助詞「に」の重ね型の語法について、富士谷成章著『あゆみ抄』(一七三三)を引用の上、

自分が物思いをして涙でぬれた顔をしていると、わが袖に写っている月も全く同じく涙でぬれた顔に見えて、ただもうびったりというように合って、の意である。

という具合に、「合ひにあひて」と解するのが穩当であると述べておられる。このように、数多の見解が窺われることを、ピックアップしておられることについては、慧眼というべきであるものの、こう解するに至る拠りどころが、残念ながら、示されていないし、当該歌自体の論理的な解析にまでは及んでいないようである。

述べてきたように、当該歌「あひにあひても思ふころのわが袖に宿る月さへ濡るる顔なる」には、初句「あひにあひて」を、

A 合ひにあひて（||何かと何かが合致する・びたりと合
う）

と解する見方と

B 逢ひにあひて（||何度も逢って）

の意であるとする見解の両説が存在するという課題、そして、

いずれに決するべきか、一定の根拠も明らかにされないままに、今日に至っているという問題が挙げられる。では、これまでの諸註の解を、細かく見てゆくこととしよう。

イ 合ひに合ひて

○窪田空穂氏『古今和歌集評釈』中巻（一九六〇・東京堂出版）

注意されるのは、この歌は、「合ひに合ひて」といい起し、「濡るる顔なる」と結んで、そうした状態を発見したということと言うことに中心を置いている点である。

○久曾神昇氏『古今和歌集 全訳注三』（一九七九・講談社）

よくもびったりとあって。同じ動詞を重ねその間に「に」をおいて意味を強める。

○佐伯梅友氏『古今和歌集』（一九八一・岩波書店）

物思いの涙に濡れた袖に宿る月まで、私の顔によく似合ってぬれているようなふうだ、の意。初句は第五句に係る。

○秋山虔氏『伊勢 炎秘めたり』（一九八五・集英社）

「あひにあひて」は「宿る月さへ」に掛かる。この「あふ」は、たがいに調子を合わせるの意。

○奥村恒哉氏『新潮日本古典集成16 古今和歌集』(一九八七・新潮社)

「合ひて」を強調した。

○小沢正夫・松田成穂氏『新日本古典文学全集 古今和歌集』(一九九四・小学館)

私の顔によく似合っていて。主語は四句の月。「あふ」は諸説あるが、「合ふ」(二つのことが合致する)の意と解する。同じ動詞の間に「に」を入れると意味を強めることになる。

○犬養廉氏『新日本古典文学大系28 平安私家集』(一九九四・岩波書店)

涙が溜まり池となった袖に月が映る。その月の濡れた顔と、私の泣き顔が合っていること。

○関根慶子・山下道代氏『伊勢集全釈』(一九九六・風間書房)

実によく一致して。ぴったりとそろいもそろって。同じことを重ねることによって、意味を強めた言い方(中略) 自分自身の状態と、袖に映る月の風情とが、涙にくれているという点でちょうど一致している、ということを強調した。

○高田祐彦氏『新版 古今和歌集』(二〇〇九・角川文庫)

涙を流す自分と涙に濡れたように見える月とが、ぴったり気持を合わせているということ。

□ 逢ひに逢ひて

○小島憲之・新井栄蔵・佐竹昭広氏『新日本古典文学大系5 古今和歌集』(一九八九・岩波書店)

「行き行きて」などと同じく「逢ひて」の強調表現。

○小町谷照彦氏『新日本古典文学大系7 後撰和歌集』(一九九〇・岩波書店)

「逢ふ」を強調した言い方。あれほど何度も逢った上で。

○工藤重矩氏『和泉古典叢書 後撰和歌集』(一九九二・和泉書院)

「逢ふ」を強めた表現。やっと逢って。「物思ふ」に係る。

○片桐洋一氏『古今和歌集全評釈』中巻(一九九八・講談社)

「ぴったりと合って」「揃いも揃って」「まさしくその折にふさわしく」と解するのが通説だが、「逢ふ」を「二つ重ねて強調した」「逢ひに逢ひて」と見たい。「何度も逢えるだけ逢って」の意。

【語釈】にも触れたが、「あひにあひて」は「ぴったりと合致して」「揃いも揃って」「まさしくその折にふさわしく」、すなわち「自分の心と月の心が合って」の意と解するのが通説だが、それでは、恋五のこの位置に存在する理由を説明できない。「いとはれてのみ世をば経ぬらむ」(七五三)、「忘れぬらん数ならぬ

身は」(七五四)、「かりにのみこそ海人は寄るらめ」(七五五)と続いてきたことを思うと、男が離れていく状況を嘆く心を表面に出して読みとるべきであろう。恋一や恋二に位置する歌のように恋の初めならともかく、ここまで進んだ二人の仲でありながら……という意を込めて「何度も何度も逢った仲になつていなから」の意と解すべきであろうと思うのである。(鑑賞と評論)

○中島輝賢氏『伊勢』(二〇一〇年・笠間書院)

「逢ひにあひて」は伊勢と月の状態が一致する、月が伊勢の心情を理解してくれている状態と理解する解釈が多い。しかしそうなると初句の「逢ひにあひて」は、二・三句を飛び越して下句にかかつていくことになり、また「さへ」という添加の意味が浮いてしまう語法に無理が生じる。

イ説「合ひにあひて」は、佐伯梅友氏の述べるように、物思いによって流した涙に濡れてしまった袖に映る月は、私の泣き濡れた顔にびったりと合っているようだ、ということであって、語法的には、結句に懸るとする見方である。そして、窪田空穂氏は、こうした月と自身の顔や心情の合致状態を「発見した」ことが、当歌の注意事項であると言われる。加えて、久曾神昇氏は、動詞のあいだに「に」を挟み込むこと

は意味を強める効果があると指摘して、奥村恒哉氏も「強調」という語を用いて説明している。袖に映る月と自身の泣き顔の情況が合致していることを、秋山虔氏は、「たがいに調子を合わせる」という言い方で説かれ、以下、小沢正夫・松田成穂・関根慶子・山下道代・高田祐彦氏に至るまで、伝統的に、そうした向きの解を述べ立てておられる。

一方、口説「逢ひにあひて」は、小島憲之・新井栄蔵・佐竹昭広氏の『逢ひて』の強調表現」との指摘と居並ぶようにして、小町谷照彦・工藤重矩氏も述べ、中島輝賢氏は、波線を付したとおり、初句が二句・三句を通過して懸る従來說の不自然さ、また、添加の副助詞「さへ」の意味が浮いてしまうとの、より細かな語法的視点で以て、述べておられる。そして、特に注目すべきは、片桐洋一氏版『全評釈』の「恋一や恋二に位置する歌のように恋の初めならともかく、ここまで進んだ二人の仲でありながら……という意を込めて『何度も何度も逢った仲になつていなから』の意と解すべきであろうと思うのである」という「鑑賞と評論」の項の一節である。こうした捉え方は、いわゆる、『古今集』の排列論に則しており、いかにも明白であるかに見える。が、しかしながら、三十一文字の世界を十全に味読した結果であるとすれば、やや貧しい感があるのも確かである。というのも、この見解は、あくまでも『古今集』の排列論を拠りどころにしたものであって、歌そのものに立ち入ったそれではないからである。

また、中島輝賢氏の

……初句の「逢ひにあひて」は、二・三句を飛び越して下句にかかっていくことになり、また「さへ」という添加の意味が浮いてしまう語法に無理が生じる。

という考え方も、疑念が残る。というのも、〈私の心境と、びたりと合って、袖に宿る月までも涙に濡れている顔をしている〉と解することができるとの一文の「さへ」は、この歌の世界において涙している人の心（あるいは、その表れである泣き顔）の比喩として、袖に宿る月が、添加されていることを意味しているのであって、初句を、「逢ひにあひて」であると決する根拠としては、積極性に欠けるためである。

三 初句「あひにあひて」を読み解く

本来ならば、竹岡氏の指摘が、受け継がれ、議論が重ねられてしかるべきであったにもかかわらず、諸見解に明瞭な根拠は示されることなく、また、論じることすらも、ほとんどなされないままであった。では、この課題を如何に考えるべきであるか。灯台下暗しとはよくいうが、私には、この問題を解く鍵が、実は、『古今和歌集』の「仮名序」にあるのではないかと思われてならない。

やまとうたは、人の心を種として、よろづの言の葉とぞなれりける。世の中にある人、ことわざしげきものなれば、心に思ふことを、見るもの聞くものにつけて言ひ出せるなり。花に鳴く鶯、水に住むかはづの声を聞けば、生きとし生けるもの、いづれか歌をよまざりける。力も入れずして、天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、男女の仲をもやはらげ、たけき武士の心をもなぐさむるは歌なり。……そもそも、歌のさま、六つなり。唐の歌にもかくぞあるべき。その六くさの一つには、そへ歌。……二つには、かぞへ歌……三つには、なずらへ歌。

君にけさあしたの霜のおきていなば恋しきごとに消えやわたらむ

といへるなるべし。へこれは、物にもなずらへて、それがやうになむあるといふなり。この歌よくかなへりとも見えず。たちちめの親のかふ蚕のまゆごもりいぶせくもあるか妹のあはずて、かやうなるや、これはかなふべからむ。四つには、たとへ歌。

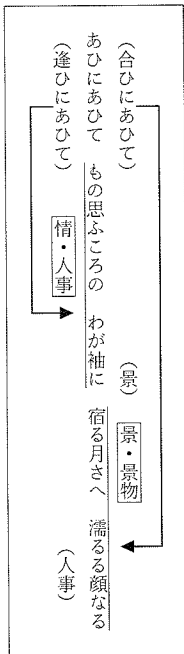
わが恋はよむともつきじ荒磯海の浜の真砂はよみつくすとも

といへるなるべし。へこれは、よろづの草木、鳥獸につけて、心を見するなり。この歌は、かくれたる所なむなき。あれど、初めのそへ歌と同じやうなれば少しさまを

かへたるなるべし。須磨のあまの塩焼く煙風をいたみ思はぬ方にたなびきにけり、この歌などや、かなふべからむ。五つには、ただごと歌……六つには、いはひ歌……以下略……

右に掲出したように、紀貫之の記した『古今和歌集』「仮名序」は、「やまとうたは、人の心を種として、よろづの言の葉とぞなれりける。世の中にある人、ことわざしげきものなれば、心に思ふことを、見るもの聞くものにつけて言ひ出せるなり」と始発する。つまるところ、和歌は、人間の心を核としながら、とりどりの言の葉として象られたもので、世人は、様々なことさらに繁忙を極めなければならぬから、心に思うことを、見たり聞いたりする景物・事物につけて、三十一文字に託すのだ、と、冒頭に書かれているのである。ここで重要なのは、自分自身が抱懐している心境を、景物・事物に託したかたちで発露するということである。そして、序はさらに続き、歌の体裁についての話題に及ぶ。具体的に「そへ歌」から始まるのだが、小考の論及しようとする課題にかかると目されるのは、「なずらへ歌」と「たとへ歌」について述べた部分である。それぞれの例として、「君にけさあしたの霜のおきていなば恋しきことに消えやわたらむへあなたにおいては、今朝、朝の霜が置くように起きて行ってしまったのならば、恋しさを覚えるたびに、あの霜のよう

に、私も消え入るような思いをするのでしょか」という歌と、「わが恋はよむともつきじ荒磯海の浜の真砂はよみつくすともへ私の恋は数え切れまい。荒磯の海の浜の真砂は数え切れたとしても」という歌が、提示されている。後人により加えられた註記によれば、前者は、心情を、ある事物や景物に喩えて詠む型式なのだ、後者は、植物や動物の様子に心情を託つ型式であるということがわかる。すなわち、こうした、事物に自身の感情になずらえて述べるという「景情一致」というべき歌論の概念に基づけば、伊勢の「あひにあひて」歌は、以下に述べるような具合に解し得るのである。繰り返しになるが、これまで見てきたように、当歌においては、恋人と一心に向き合ってきたがゆえに、思い悩み涙にくれてしまっているという情況が、着物の袖に宿る月——そうした景物に託されている。つまり、袖に宿る月を、比喩的に用いることで、表現されているわけである。例えば、当該歌の構造を図示するならば、以下のように捉えるのが可能であろう。



右図からもわかるとおり、「もの思ふころのわが袖に」と

いう〈情・人事〉の第二・三句には「逢ひにあひて」が、第四・五句「宿る月さへ濡るる顔なる」という〈景・景物〉を詠み込むところには、「合ひにあひて」が、懸る。つまり、人間の心情とそれに伴う景物、これらを描出する言の葉が、相互に絡み合うことで、一つの世界が成り立っているというわけである。まさに、約一〇〇年前の「仮名序」における貫之の提示が、今日、和歌を読み解くための、少なくとも、今問題にしている初句「あひにあひて」に込められている意味合いを考察する、一つのヒントに成り得るのである。

例えば、「……月さへ濡るる顔なる」という表現をみてもわかる。「濡るる顔」とは、本来、人間の涙に濡れた顔を指しているのだが、この歌においては、景色である「月」のことをも表している。あるいは、「袖」ということばは、たしかに、着物の袖という面からいえば、モノであるが、歌の中の〈女〉の着物の袖であるとすると、それは、その女性の一部とも看故し得る。いったい、語句のレヴェルですら、景情が重層しており、結果的には、それらのことばが、歌の世界を形象化しているといつてよからう。

ひとつの語句に二つの次元（ここでは、心情と景物をいう）が、同居しているとすれば、「あひにあひて」なる表現をもまた、そのように考えることができるのではないか。つまり、図解のように第二・第三句に懸る意味合いの「逢ひにあひて」と、第四・結句（下句）に懸る意味の「合ひにあひて」が、

初句「あひにあひて」には、響いているとみてよいのではないか。すなわち、「あひにあひて」もまた、この和歌における「景情一致」というべき重層構造の一端を担っているといふべきではないだろうか。

では、総括の意味合いも込めて、当該歌「あひにあひても
の思ふころのわが袖に宿る月さへ濡るる顔なる」の拙訳を示しておくこととする。

あひにあひて……逢うことを重ねて、思い悩む頃のわた
くしの（着物の）袖に宿る月までも、（わ
たくしの顔だけではなく、心境と）びたり
と合つて、（涙に）濡れている顔をしてい
ることよ。

これまでは、「あひにあひて」なる初句は、いずれの意味をなしているかを、詮索するに留まっていたわけであるが、『古今和歌集』『仮名序』を再読した上、先にみられるような王朝和歌の理念を援用して読み解くことで、新たな地平を開拓することに到り着いたのであった。つまりは、伝統的な「景情一致」という王朝和歌の論理をふまえ、「もの思ふころのわが袖に」という《情》の部分に懸る「逢ひにあひて」と、「宿る月さへ濡るる顔なる」という《景》の部分に懸る「合ひにあひて」といった具合に解釈することが可能であると論

究してきたのである。

四 おわりに

以上の解釈を例に、和歌を読み解くということについて、いささか、考えてみたい。三十一文字の世界は、三十一文字を超越するメッセージ、言い換えれば、ことばの秩序を限界まで押し拡げることによって成立している。詠み手（物語でいえば作者、日記でいえば書き手か）は、三十一文字の制約がある空間に、ありったけの想いを込める。そのようにして完成した和歌の世界が、多層構造を呈しているのは、至極当然であるといつていい。それは、いにしえの『古今和歌集』の「仮名序」に展開されていることからいっても明白である。とは言うものの、同時に、わたしたちが、その当然というべき概念を、忘れることなく心に刻み込み、留めておくこともまた、非常に難しいのである。和歌や、和歌にかぎらず様々な文章を読み解くわたしたちには、込められた想いに、限りなく接近するために、一字一句を大切に解釈することが必要であろう。冒頭で述べたとおり、解釈というのは、一文が意味する事柄を真当に受け入れることであるから、歪曲があってはならない。人生の一齣が吐露されている短詩としての和歌を解釈するということは、いふなれば、人間の心の一端に出会すということにつながるのである。

【註】

(1) 『古今和歌集』の本文引用は、すべて、高田祐彦氏訳注版

〈二〇〇九・角川文庫〉に拠る。

(2) 『後撰和歌集』には、「もの思ひけるころ」という詞書とともに、「わが袖に」は「わが袖は」として入集、なお、『伊勢集』（西本願寺本）には「あひにあひて物思ふときのわが袖

は宿る月さへ濡るる顔なる」というかたちで収載されている。

(3) 主な先行研究として、影山美知子氏「『あひにあひて』考」

『淑徳短期大学研究紀要』第三十三号・一九九四・二）が挙げられる。

(4) 該当部分は、次のとおり。

女君の濃き御衣に映りて、げに濡るる顔なれば、

月影の宿れる袖はせばくとももとめて見ばやあかぬ
光を

いみじと思いたるが心苦しければ、かつは慰めきこえた
まふ。

「行きめぐりつひにすむべき月影のしばし曇らむ空
なながめそ

思へばはかなしや。ただ、知らぬ涙こそ心をくらすもの
なれ」などのたまひて、明けぐれのほどに出でたまひぬ。

（阿部秋生・今井源衛・秋山虔・鈴木日出男氏「新
編日本古典文学全集 源氏物語2」一九九五年・小

学館）

(5) 該当部分は、次のとおり。

十二月二十五日、宮の御仏名の召しあれば、「その夜
ばかり」と思ひて参りぬ。

白き衣どもに濃き搔練をみな着て、四十余人ばかり出

でるたり。しるべし出でし人の陰に隠れて、有るが中
うちほのめいて、暁にはまかづ。

雪のうち散りつつ、いみじくはげしく。冴え凍る暁が
たの月の、ほのかに濃き搔練にうつれるも、げに「濡る
顔」なり。道すがら、

年は暮れ夜は明けがたの月影の袖にうつれるほど
ぞはかなき

(小谷野純一氏『校注更級日記』一九九九年・新典社)